「革新」のリハビリテーション

小学生の頃に見た「機動戦士ガンダム」(TV 放映 1979-80 年、劇場版 1981-82 年)、その後半の重要なシーンの一つで交わされる主人公の台詞に、「守るべきものがなくて戦ってはいけないのか？」というのがあった。無敵のガンダムを駆る主人公だが、家族は崩壊、親友もいず、恋人もいない。そしてこのセリフを交わした相手、たった一人の友人・恋人候補、同類としてつがいになる可能性のあった同じ革新者を、この主人公は戦闘で殺してしまう。

小学生向けのアニメだったとはいえ、「ヒトの革新（ニュータイプ)」を描いたこの作品で、「守るべきもの」への言及は本質的なものだったろうと思う。当時の（そして今でも）子供向けの多くの物語では、地球の平和を守るとか、愛する家族や仲間を守るとかが主張され、「人は守るべきものがあるから強くなれる」と教えていた（いる)。

「孤独な革新者」というキャラクターの形象は、「自分はただの人と違う何者になれるかもしれない」と思う（・願う）思春期の入り口の子供の自意識をくすぐったはずだ。仕掛けとして、本当によくできていたと思う。

ほどなくして小学生は中学生になり、大人たちとの会話の中で「保守／革新」という言葉を覚える。その思春期には、「守るべきもの」とは過去からくるしがらみであり、「自己の革新」にとっての足枷になるものだと信じ込むようになっていた（笑)。

もちろん、これは自意識をくすぐる（多少パターナリスティックな動機から作られた）子供向け物語で示されたことにすぎない。ただし、「守ること・守るもの」と「革新」の関係の本質性は、今から考えてみても普遍的なものであったように思う。

考えてみれば、無邪気に「現在の理想を投影する過去」を持つ「保守」と違って、過去を「乗り越えられなければならないネガティブなもの」と認識する「革新」は、本来、歴史のなかの孤独と戦わなければならない存在である。

過去に自分を満たしてくれるモデルは無く、確固たる未来もまだ見えない。一方で、学べば学ぶほど、歴史は不正やしがらみに満ちていることが分かる。そして例えば戦争史を勉強すれば、戦争に対する怒りを抱くようになることもあるかも知れないけれども、同時に、戦争がなくならないことも理解できるようになってしまう。歴史は戦争に満ちていることを知り、歴史を学んだことを恨むようにすらなるかもしれない。

では歴史のない世界はどうか。じつはこれはこれで幸せな世界かもしれないのだ。

例えば、不条理を描く筒井康隆の短編に「ヒストレスヴィラからの脱出」というのがある（『アフリカの爆弾』所収)。歴史がないような（≒ヒストリーレス、あるいは「非ストレス」という語呂合わせもあっただろうか）社会。ここに、世の中の全てに嫌気が差して逃げ込んだ男が、事情により気が変わってその村から脱出しようとする話である。

村はすべてにおいて、のんびりしている。まず、駅で切符を売っていない。切符を印刷

するところから始まるので。主人公は駅員から印刷屋に行くように頼まれる。そして印刷屋に行くとできあがるまで待っていてくれといわれる。できあがるまで時間を潰そうと映画館に入るが、映画館では10分ほどの退屈な無声映画が流されているだけで、もちろんそれはすぐ終わってしまう。他の映画の用意はない。映画技師にはもう一度見るかいと聞かれる。彼がいうには、特別なことが起こらない映画だからこそ、想像でいろいろ楽しむことが出来るので何度見ても飽きないはずだという。

そうして村から脱出しようとする主人公のイライラは次第に溜まっていき――、という話である。同じ筒井康隆の短編でも、その不条理さにおいて強烈な印象を残す「傷ついたのは誰の心」(『笑うな』所収）ほどではないが、何というか、非常に徒労感の残る（が忘れることのできない）短編のひとつである。

主人公が出会う村人たちは、何も望まない代わりに、少なくとも不幸ではない。毎日はただ繰り返しのみで安定していて、「変化」やその説明としての「歴史」を必要としていない。村人にとって、歴史や変化が必要なのは、それだけ不幸だということなのだろう。

例えば、敗戦直後の1940年代後半には「世界史」ブームもあった。皇国史観が否定され、占領期には日本史研究が自由に出来なかったこともあり、さまざまな種類の世界史入門書が溢れた。敗戦という不幸（というか破滅）を導いたものに対する説明は、世界史の流れを読み違えたからだとされた。

さらに、少し後の遠山茂樹･今井清一･藤原彰による新書、ベストセラーになった『昭和史』(岩波書店)。これが書かれたのが昭和 34（1959）年のことである。「昭和」は結局その後 30 年続いたけれども、そのことを知るよしもない当時の人々は、「昭和の歴史」を導いてしまったものの説明を必要としていた。それらに書かれたのは戦争を産み出した「絶望的な歴史」だったが、それでも、いや、それだからこそ、人々はそれを欲したのである。

前回まででも書いたように、明治を理想とする限り負け続けざるをえない現在の「保守」は、歴史としての「戦後社会」を否定するという、「革新」の側面も持っている。「保守」にとって「戦後」とは、過度な民主化による弊害が現れた、否定するべき時代である。

一方、(与野党問わず)「革新」が敗戦後に積み重ねてきた実績は、私たちの社会の物質的・精神的な「豊かさ」として分厚い層をなしている。これを「守り・継続する」のが「革新」ということであれば、こと現在においては、「革新」こそ、「守るべきものがある」立場ということになる。(これを「生活保守主義」と名付け、長期安定「保守」政権とこれを批判し修正を要求する「革新」勢力の、眼に見えない連合とすることもできるだろう)

「革新」は今や、現在を否定できる＝「守るべきものを持たない」カッコいい創造者・ヒーローではなく、「守るべきもの」のしがらみやそれに伴う醜悪さと向きあわなければならない、カッコ悪い存在である。「守るべきもの」が、価値のある巨大なものであればあるほど、(本来の)「保守」がそうであるように、人々を惹きつける希望に溢れた未来図は示されえず、「守る」こと自体を目標にした、つぎはぎだらけのものとなる。

これでは不人気も当然だろう。一方で、いま「保守」に人気があるようにみえるとすれ

ば、現在を（「守るべきもの」としてではなく、）否定し変える対象としているからである。

この現状認識から出発することはできないか。これが「革新」にリハビリテーションが必要だと思う理由である。そしてそのとき、「歴史を体感する」ことは何をもたらすのか。引き続き「革新のリハビリテーション」を論じる必要がある。